琉球大学学術リポジトリ

沖縄・先島諸島のフィリピン人女性たち：島の結婚移民として

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): フィリピン人, 結婚移民, 連鎖移動, 興行労働
	キーワード (En):
	作成者: 高畑, 幸, Takahata, Sachi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010089

移民研究 第 11 号　2016　37-54

沖縄・先島諸島のフィリピン人女性たち
—島の結婚移民として—

高 畑　幸

Ⅰ．問題設定
Ⅱ．先行研究と調査地の概況
Ⅲ．考察
Ⅳ．むすび

キーワード：フィリピン人，結婚移民，連鎖移動，興行労働

Ⅰ．問題設定

本稿の目的は，離島におけるフィリピン人結婚移民の定住への社会的条件と彼女らの地域社会における役割を再考することである。現在，日本各地で人口減少が問題となっている。それは過疎地では 1970 年代から続く課題であり，かつて外国人の結婚移民で「嫁不足」を補おうとした時代があった。すなわち，1980 年代後半，東北や四国の過疎地には行政主導により外国人花嫁が来住している。しかし，行政主導の縁組は 1 ～ 2 年で停止し，その後，業者仲介による縁組（以下，業者婚という）で来日するフィリピン，韓国，中国等からの花嫁が増加した。一方，日本へ出稼ぎに来た女性が結婚移民となる事例も多い。特に，1980 年代後半から 2005 年まで大量に来日したフィリピン人の女性興行労働者（エンターテイナー）が，出演店へ客として来た男性と結婚し日本各地で定住している。

これまで，沖縄のフィリピン人研究には，米軍基地での雇用に伴い来沖したフィリピン人の調査はあったが，興行労働から定住した結婚移民の先行研究は少ない。そこで，本稿では，①彼女らの定住を可能にした社会的要因は何だったのか，②彼女らはいかに地域社会に溶け込んだのか，③結婚移民女性の地域社会への貢献は何かに焦点を当てながら，離島での彼女らの定住と生活を通じて沖縄のフィリピン人研究に新たな視点を加えたい。

Ⅱ．先行研究と調査地の概況

1．先行研究

フィリピンと沖縄とは，「アメリカにより支配された経験」があることが共通点であろう。戦前の沖縄からアメリカ統治下のフィリピンへの出稼ぎに始まり，1950 年代のフィリピンから在沖縄の米軍基地への出稼ぎ等，フィリピンと日本という国の枠組みを超えて，フィリピンと沖縄の間では人の移動が頻繁に行われてきた。これら沖比間の人の移動につ

いては，鈴木規之・玉城里子，Yu-Jose, Lydia，ジョハンナ・ズルエタらの論考がある。ズルエタは在沖のフィリピン人を「フィリピン・ウチナーンチュ」と呼んでおり，沖縄在住の外国人の中でフィリピン系の人びと（日本国籍・米国籍取得者を含む）の存在感は大きい。また，杉井　信によると，1950 年代から 60 年代にかけて米軍基地で働くフィリピン人労働者と沖縄女性との結婚が増加した。その後，1972 年の沖縄返還に伴いフィリピン人労働者が大量解雇され，夫のみ，あるいは家族でフィリピンへ帰国する事例が多く見られた（杉井，2010）。

一方，興行ビザによるフィリピン人女性の流入は 1980 年代後半から日本各地で見られたが，仲介業者および両国政府を媒介とした送出と雇用のメカニズムについては，阿部亮吾および津崎克彦が明らかにしている。ひとつのプロモーション（興行会社）が複数の出演店（フィリピンパブ）と契約し，興行労働者を派遣していた。また，過疎地の結婚移民に関する研究として，行政主導により縁組・来住した「農村花嫁」の 20 年後については Takahata Sachi，業者婚については武田里子および賽漢卓娜による先行研究があるが，興行労働者から結婚移民となった人びとを端緒とした連鎖移動（紹介婚）の研究は管見の限りほとんどない。

以下に詳述する宮古のＡ島については，林　研三による通婚圏に関する研究がある。2001 年から 2004 年に林らが行ったＡ島の家族慣行と祭祀組織に関する全戸調査（73 世帯）によると，この時点で 6 人のフィリピン人妻の存在が認知されている。しかし，彼女らへの聞き取り調査は行われず，その夫の年齢がデータとして示されるのみであった。この時点での婚入者出身地（婚姻前居住地）は島内が 56，宮古島市内（島外）が合計 7，沖縄本島が 1 であるところ，日本本土とフィリピンが同数の 5 であった（不明 1）。林によると，1930 年生まれの男性は村内婚が多かったが，1940-60 年代生まれの男性にフィリピン人女性との結婚が増え，1970 年代以降生まれの男性に本土出身者との結婚が増加した（林，2013）[1)]。Ａ島におけるフィリピン人女性の婚入は特定期間に多発したことがわかり，何らかの媒介者がいたことが示唆される。

2. 調査地の概況：離島に多いフィリピン人

まず，本稿の主題である「離島の外国人住民」について，統計資料を見て行こう。表 1 は，沖縄県内の市町村の外国人人口にしめるフィリピン人割合で市町村をランキングしたものである（2013 年末現在）。これによると，石垣市には 47 人，宮古島市には 77 人のフィリピン人が暮らす。各市の外国人人口にしめるフィリピン人比率は石垣市が 17.3%，宮古島市が 37.0%と高い（全国平均は 10%）。さらには，上位を占めるのは，宮古郡多良間村（フィリピン人割合 85.0%），島尻郡伊平屋村（同，84.6%），島尻郡北大東村（同，80.0%），島

表１　沖縄県内の市町村のフィリピン人比率ランキング（2013 年末現在）

郡	市町村	総数	中国	台湾	韓国・朝鮮	フィリピン	同構成比(%)	ブラジル	ベトナム	同構成比(%)	ペルー	米国	その他
宮古郡	多良間村	20	0	0	0	17	85.0	0	3	15.0	0	0	0
島尻郡	伊平屋村	13	1	0	0	11	84.6	0	0	0.0	0	1	0
島尻郡	北大東村	5	0	0	0	4	80.0	0	0	0.0	0	1	0
島尻郡	南大東村	19	2	0	0	14	73.7	0	0	0.0	0	2	1
八重山郡	与那国町	8	0	0	2	5	62.5	0	0	0.0	0	0	1
島尻郡	伊是名村	17	2	0	3	9	52.9	0	0	0.0	0	1	2
中頭郡	嘉手納町	86	3	2	5	35	40.7	3	0	0.0	1	30	7
国頭郡	金武町	89	4	1	1	35	39.3	2	0	0.0	2	35	9
	宮古島市	208	18	5	19	77	37.0	2	34	16.3	0	17	36
島尻郡	八重瀬町	50	7	2	4	18	36.0	1	1	2.0	0	13	4
	南城市	119	12	0	9	39	32.8	5	0	0.0	1	12	41
国頭郡	国頭村	21	1	1	0	6	28.6	0	0	0.0	2	5	6
	宜野湾市	941	154	28	64	255	27.1	32	3	0.3	8	245	152
島尻郡	久米島町	27	4	2	2	7	25.9	2	0	0.0	1	9	0
島尻郡	渡嘉敷村	4	0	0	1	1	25.0	0	0	0.0	1	1	0
	沖縄市	1,252	110	19	66	293	23.4	21	5	0.4	75	478	185
島尻郡	南風原町	73	21	3	4	16	21.9	1	2	2.7	2	14	10
中頭郡	北谷町	498	40	8	44	97	19.5	35	0	0.0	11	175	88
国頭郡	大宜味村	11	0	0	0	2	18.2	1	0	0.0	0	2	6
中頭郡	北中城村	311	14	1	8	55	17.7	5	0	0.0	2	134	92
	石垣市	272	28	24	37	47	17.3	6	0	0.0	2	24	104
	糸満市	192	45	9	8	33	17.2	4	0	0.0	0	22	71
島尻郡	座間味村	6	0	1	2	1	16.7	1	0	0.0	0	0	1
国頭郡	伊江村	13	7	0	0	2	15.4	0	0	0.0	0	2	2
島尻郡	与那原町	99	19	4	15	15	15.2	2	8	8.1	8	19	9
	名護市	350	110	7	48	51	14.6	13	5	1.4	3	55	58
	うるま市	597	67	6	21	80	13.4	2	50	8.4	36	214	121
国頭郡	東村	8	2	0	1	1	12.5	0	0	0.0	0	1	3
中頭郡	読谷村	380	9	14	24	45	11.8	4	2	0.5	3	209	70
国頭郡	本部町	43	3	4	4	5	11.6	1	0	0.0	0	12	14
	豊見城市	169	53	10	24	17	10.1	9	1	0.6	4	25	26
	那覇市	2,552	666	152	262	239	9.4	50	194	7.6	54	227	708
	浦添市	767	71	5	42	69	9.0	4	69	9.0	5	109	393
国頭郡	今帰仁村	36	12	0	5	3	8.3	2	0	0.0	0	8	6
国頭郡	宜野座村	27	0	0	0	2	7.4	2	0	0.0	0	16	7
国頭郡	恩納村	337	36	14	19	10	3.0	4	4	1.2	9	61	180
中頭郡	西原町	409	103	17	38	8	2.0	6	17	4.2	16	36	168
中頭郡	中城村	110	16	5	9	1	0.9	10	2	1.8	9	24	34
島尻郡	粟国村	4	1	0	0	0	0.0	2	0	0.0	0	1	0
島尻郡	渡名喜村	1	0	0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0	1
八重山郡	竹富町	54	2	19	4	0	0.0	14	2	3.7	1	4	8

出典：在留外国人統計より作成.

尻郡南大東村（同，73.7%）等，いずれも離島にある村であった。「沖縄の離島に外国人がいるとすれば，それはフィリピン人であることが多い」と言えるのである。

表 1 でもう一つ留意すべきは，宮古島市におけるベトナム人の多さである。在留外国人

表 2　自治体の外国人人口に占めるフィリピン人割合（2013 年末現在）

都道府県	郡	市町村	総数	中国	台湾	韓国・朝鮮	フィリピン	同構成比(%)	ブラジル	ベトナム	ペルー	米国	その他
東京都		青ヶ島村	2	0	0	0	2	100.0	0	0	0	0	0
鹿児島県	大島郡	天城町	35	1	0	0	31	88.6	0	1	0	1	1
秋田県	北秋田郡	上小阿仁村	22	0	0	1	19	86.4	0	0	0	0	2
宮崎県	東臼杵郡	美郷町	14	1	0	1	12	85.7	0	0	0	0	0
沖縄県	宮古郡	多良間村	20	0	0	0	17	85.0	0	3	0	0	0
沖縄県	島尻郡	伊平屋村	13	1	0	0	11	84.6	0	0	0	1	0
鹿児島県	大島郡	喜界町	44	4	0	2	37	84.1	0	0	0	1	0
福島県	双葉郡	葛尾村	6	1	0	0	5	83.3	0	0	0	0	0
宮崎県	東臼杵郡	椎葉村	5	0	0	0	4	80.0	0	0	0	0	1
沖縄県	島尻郡	北大東村	5	0	0	0	4	80.0	0	0	0	1	0
鹿児島県	大島郡	知名町	64	9	0	3	48	75.0	0	0	0	2	2
山口県	熊毛郡	上関町	4	0	0	1	3	75.0	0	0	0	0	0
沖縄県	島尻郡	南大東村	19	2	0	0	14	73.7	0	0	0	2	1
鹿児島県	大島郡	徳之島町	51	3	0	6	37	72.5	0	0	0	2	3
北海道	厚岸郡	浜中町	36	5	0	0	26	72.2	0	3	0	1	1
鹿児島県	大島郡	伊仙町	21	2	0	2	15	71.4	0	0	0	2	0
島根県	隠岐郡	隠岐の島町	77	3	0	16	52	67.5	0	0	0	2	4
長野県	木曽郡	上松町	64	9	0	8	43	67.2	2	0	0	1	1
徳島県	那賀郡	那賀町	15	1	0	0	10	66.7	0	0	0	4	0
宮崎県	西臼杵郡	日之影町	6	0	0	0	4	66.7	0	0	0	2	0

出典：在留外国人統計より作成.

統計によると，宮古島市におけるベトナム人人口は，ベトナム人が市町村単位で独立した国籍カテゴリとして初めて集計された 2012 年末現在は 32 人だったが，2013 年末には 34 人（市の外国人人口の 16.3%, 沖縄県内の自治体で最大値）となった。同市においてはフィリピン人に次ぐ第二の外国人集団がベトナム人となっている。

離島にフィリピン人が多いという傾向は沖縄に限ったことではない。表 2 は，全国の市町村の外国人人口に占めるフィリピン人割合のランキングである（2013 年末現在）。全国的にみてもフィリピン人割合の上位を占めるのは過疎地で，さらには上位 20 自治体のうち 12 が離島にある自治体である。

従って，本調査の調査地である石垣市および宮古島市は，過疎地および離島に見られる全国的な傾向と同様に，フィリピン人割合が比較的高い自治体と言える。

3. 研究方法

本調査では，2013 年に石垣島，2014 年に宮古（宮古島周辺離島を含む）において聞き取り調査を行った。表 3 および 4 が対象者一覧表である。カトリック教会で勤務するフィリピン人シスターや同胞団体の会長をキーパーソンとし，フィリピン人結婚移民を紹介してもらい訪問調査を行った。そのほか，第二世代が通う学校や，婦人会等の地域組織等で

表 3　石垣調査，対象者一覧表

番号	カテゴリ	生年	来日年	結婚年	出身地	父職	母職	夫職	現職
I-1	フィリピン人女性	1966	1988	1992	Luzon	運転手	主婦	海ぶどう養殖	家業手伝い
I-2	フィリピン人女性	1967	1991	1994	Visayas	農業	野菜販売	死別	調理
I-3	フィリピン人女性	1970?	1994	1993	Visayas	農業	主婦	専門職	
I-4	フィリピン人女性	1966	1989	1999	Metro Manila	タクシー運転手	食堂経営	離別	介護
I-5	フィリピン人女性	1974	1997	2000	Visayas	漁師	主婦	民間企業	無職
I-6	フィリピン人女性	1973	1989	1995	Metro Manila	不明	不明	不明	不明
I-7	フィリピン人女性	1977	1994	1996	Metro Manila	警察官	看護師→営業	離別	ウエイトレス
I-8	フィリピン人女性	1974	1997	2000	Mindanao	農業	農業	民間企業	無職
I-9	フィリピン人女性	1963	1996	2001	Mindanao	農業	農業	労務	
I-10	第二世代	1994	日本生まれ						大学生
I-11	I-3の夫	1960		1993					専門職
I-12	I-6の夫								自営
I-13	カトリック教会関係者								
I-14	カトリック教会関係者								

表 4　宮古調査，対象者一覧表

番号	カテゴリ	生年	来日年	結婚年	出身地	父職	母職	夫職	現職
M-1	フィリピン人女性	1967	1993	1994	Visayas	不明	不明	たばこ農家	介護
M-2	フィリピン人女性	1969	1997	2004？	Metro Manila	軍人	洋裁	労務	レストラン
M-3	フィリピン人女性	1956	1997	1997	Luzon	不明	不明	たばこ農家	介護
M-4	フィリピン人女性	1965	1988	1994	Luzon	電気工事	飲食店経営	退職後	介護
M-5	フィリピン人女性	1962	2002		Luzon	エンジニア	看護師→主婦	たばこ農家	農業・英会話
M-6	フィリピン人女性	1975	2001	2000	Visayas	自動車修理	不明	専門職	レストラン
M-7	フィリピン人女性	1962	1990	1991?	Metro Manila	船員	主婦	さとうきび農家	ホテル
M-8	フィリピン人女性	1954	1971	1992	Luzon	軍人	食品小売	海ぶどう養殖	農業
M-9	フィリピン人女性	1961	1984	1988	Metro Manila	大工	菓子小売	労務	食品工場
M-10	フィリピン人女性	1971	2002	2002	Visayas	農業	農業	不明	ホテル
M-11	フィリピン人女性	1971	1991	1994	Luzon	農業	農業	専門職	介護
M-12	フィリピン人女性	1965	1990	1997		不明	不明	不明	ホテル
M-13	第二世代	1997	日本生まれ		宮古				高校生
M-14	第二世代	1992	日本生まれ		北関東				大学生
M-15	第二世代	1995	日本生まれ		宮古				大学生
M-16	第二世代	1993	日本生まれ		首都圏				大学生
M-17	第二世代	1995	2001		Visayas				専門学校生
M-18	カトリック教会関係者	1947							
M-19	カトリック教会関係者								
M-20	婦人会要職者								

表 5　沖縄県内各市の面積比基地割合とフィリピン人比率（2012 年現在）

		市の面積に占める基地割合		外国人人口						
	市名	米軍	自衛隊	総数	中国	台湾	韓国・朝鮮	米国	フィリピン	（構成比）
1	宮古島市	0.0%	0.1%	217	22	4	16	23	83	38.2%
2	南城市	0.0%	0.8%	114	11	0	10	10	37	32.5%
3	宜野湾市	32.4%	0.0%	917	153	25	70	244	255	27.8%
4	沖縄市	34.5%	1.4%	1,205	109	11	61	446	287	23.8%
5	糸満市	0.0%	0.6%	161	45	1	5	22	30	18.6%
6	石垣市	0.4%	0.0%	264	31	20	36	24	45	17.0%
7	うるま市	7.2%	0.8%	501	65	2	29	197	82	16.4%
8	名護市	11.1%	0.0%	336	120	1	28	55	46	13.7%
9	那覇市	1.4%	8.8%	2,231	715	115	253	207	236	10.6%
10	浦添市	14.2%	0.0%	662	70	2	40	107	70	10.6%
11	豊美城市	0.0%	0.0%	182	60	4	23	26	18	9.9%

注「外国人人口に占めるフィリピン人比率」が県内最高は宮古島市。基地ファクターは極小。
南城市・宜野湾市・沖縄市・糸満市はいずれも沖縄本島。６位の石垣市は離島かつ基地ファクターが極小。
出典：在留外国人統計および沖縄県「平成 25 年　基地の概況」 http://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kichitai/documents/01kitinogaikyou.pdf より作成.

も聞き取りを行った。使用言語はインタビュアーにより異なるが，日本語，英語，フィリピン語のいずれかであった。インタビューの音声データを文字起こし（訳し起こし）し，共同研究者の間で共有した。そのほか，地方新聞や郷土資料も参照した。

本調査の調査対象となる結婚移民は，石垣島で 9 人，宮古（宮古島周辺離島を含む）で 12 人の合計 21 人であった。夫の職業は企業勤務，農業（さとうきび，葉タバコ，海ぶどう養殖等）であり，結婚移民の職業（ほとんどがアルバイト）はホテルの客室清掃，介護職，食堂や小売店店員等が多い。父職・母職はさまざまだが，実家が農家（米，椰子等）という結婚移民も複数いた。

2 つの調査地を比較すると，石垣島よりも宮古で農業従事者の割合が高い。女性たちの来住経緯は，興行労働者から結婚移民となった女性たちによる紹介婚が相次ぎ，次第に結婚移民女性が増加したというものであった。なお，これらの調査地では，米軍基地およびその周辺産業での雇用による外国人の来住は極めて少ないと思われる。表 5 は沖縄県内各市の面積比基地割合とフィリピン人割合（2012 年現在）を示したものである。これによると，自治体の面積に占める基地の割合は石垣島で 0.4%，宮古島で 0.0%と極めて小さい。

2 つの調査地では，人口や都市化の度合い，地域特性に違いがある。両地域を同時に論

じるのは困難であろう。そのため，本稿では，宮古のＡ島への連鎖移動が特徴的なフィリピン人結婚移民（現在残っているのは 6 人，年齢 30 ～ 50 代）に焦点を当てながら，結婚移民が離島で定住した社会的要因について考察していきたい。

Ⅲ．考察

1．定住を可能にした社会的要因

Ａ島においては，地縁，血縁，社縁と模合によるネットワークでフィリピン人結婚移民が連鎖的に来住したと言える。業者婚ではない。さらには，結婚移民同士も，結婚相手となる男性同士も，親族や同僚といった互いに親密な関係にある。以下に，4 つのネットワークについて詳しくみていこう。

1）地縁

第一に，Ａ島は狭い。面積は 2.84 平方キロメートルで人口は 173 人と少なく，住民同士は対面的な関係が形成されている。

2013 年の統計資料によると，宮古島市の住民基本台帳人口は 55,006 人（うち外国人 204 人）である。Ａ島は世帯数 97，人口 173 人である。面積 2.84 平方キロメートルで周囲約 9 キロの島だが，島の大半は畑であり，集落は 1 つしかない。島の中で住居があるのは約 200 メートル四方の範囲である。産業はサトウキビ栽培, 肉牛飼育, たばこ栽培となっている（統計みやこじま）。農家戸数 39（うち専業 29）である。A 島（R 地区大字 A）の高齢化率は明らかではないが，A 島を含む R 地区の 65 歳以上人口比率は 30.9％と，全国平均 25％を上回る。2013 年度を最後にＡ中学校は廃校となり，現在，島内にはＡ小学校のみとなった（沖縄県離島総合情報サイト）。

Ａ島は少子高齢化が進み，今や残された人びとが狭い生活圏で暮らす農業の島なのである。以下，結婚移民の語りを引用しながら，4 つのネットワークを考察する。

2）血縁

Ａ島では親族の中で連鎖的にフィリピン人との結婚が行われた。例えば，Ｄ家は，伝統的祭祀を司る女性の子ども 6 人のうち，息子 5 人がフィリピン人女性と結婚し，娘 1 人はフィリピン人女性の姑となった。

＜Ｄ家の兄弟が次々にフィリピン人女性と結婚，フィリピン人女性も親族関係＞[2)]

インタビュアー：M（調査対象外）さんとどういう関係？

M-8：M（調査対象外）は M-1 のいとこのお母さん，フィリピンのお母さん。M-1 のお母さん，フィリピン。

インタビュアー：フィリピンのお母さん。

M-8：うん。フィリピンのお母さん，M のお母さん，兄弟。

インタビュアー：M さんのフィリピンのお母さんと M-1 さんのフィリピンのお母さんが兄弟。

M-8：そう。だから紹介した。あと，M-1 の旦那さん，兄弟。これの旦那さん。R（調査対象外）の。

インタビュアー：R さんの旦那さんと M-1 さんの旦那さんが兄弟。

M-8：兄弟。あと，M-11 は，M-1 は，お父さん，お父さん，兄弟。フィリピンのお父さんよ。

インタビュアー：M-11 さんと M-1 さんのフィリピンのお父さんが兄弟？

M-8：兄弟。だから同じの名前（苗字）。

逆に，フィリピン人女性が主体的に，夫のきょうだいにフィリピン人女性を紹介することもある。例えば，現在は宮古（A島外）に暮らす M-7 は，かつてA島の男性と結婚したが離婚してフィリピンへ一時帰国していた時期があった。その間，娘たちを通わせていた私立学校の女性校長が独身だと知る。後に自分が宮古の別の男性と再婚し再来日すると，夫の兄に女性校長を紹介して結婚させた。その女性が現在も宮古（A島外）で暮らす M-5 である。

＜ M-7 が再婚した夫の兄を M-5 に紹介＞[3)]

M-5：M-7 が私にこう言った。「いい家族だよ。みんな優しいから心配いらない。」でも私は一生独身のままでいたいと言った。でも M-7 が「試してみて。いい家族なんだから。絶対後悔はしない」と言った。…（中略）…でもね，当時，空港で今の主人を初めて見たときに，手を引きたかった。複雑な気持ちだった。なんか（結婚）したくないと思っている自分もいれば（結婚）したい自分もいる。でも M-7 は私をいつも励ましてくれた。「大丈夫だよ。心配しないで」と。最初フィリピンに来たのは旦那じゃなくて，義理の父だった。求愛したのは旦那じゃなくて義理の父。だから良い意図があるという気持ちが伝わってきた。…（義理の父は）私の両親ときょうだいと話をつけた。だから OK を出した。本気だったみたいだし、光栄だった。

3）社縁

社縁がA島での結婚移民を特徴づけている。A島での最初の結婚移民は，興行労働で来沖した女性（M-8）であった。1954 年生まれなので，興行労働を経て日本に定住した女性たちのなかでも年長者と言える。彼女が所属していたプロモーション（興行会社）は沖縄本島および複数の離島にある出演店と契約をしていたようだ。その後，同じプロモーションから宮古島にあるフィリピンパブ S に次々とフィリピン人女性がやってくる。興行労働者の場合，6 か月間の契約労働期間中は出演店の近くにある寮で共同生活をする。そこで

形成される先輩・後輩関係が，タテ社会というよりは姉妹的な親密さを伴って女性たちの絆を作っている。

Ａ島の調査対象者はすべて同じプロモーションに所属していた。M-8 が最初の「フィリピン人花嫁」となり，彼女は同じプロモーションの後輩である M-1 を島の男性に紹介して嫁がせた。その後，M-1 とプロモーションおよび出演店で同期であり，就労中は共同生活をしていた M-7，M-2 も宮古（Ａ島外）の男性に嫁いでいる。

女性たちの語りから推測される結婚移民の状況は，以下のとおりである。Ａ島へのフィリピン人花嫁の第一波は，Ａ島への最初の結婚移民である M-8 が，同じプロモーションの後輩たちがいるアパートに遊びに行き，相談に乗るなどして親しくなり，Ａ島での生活について話すとともにＡ島へ嫁ぐよう勧めたことが契機となった。M-8 の語りを読む限り，彼女は嫁ぎ先の夫の家族や近所の人たちから，自分の息子もフィリピン人女性と結婚させたいから紹介してほしいと頼まれたようだ。M-8 も，Ａ島という離島で自分だけがフィリピン人という状況は寂しいので，仲間を増やしたいという思いもあり，紹介の依頼に応じたと思われる。M-8 が何人を紹介したのかについて，彼女自身も記録を作っておらず記憶があいまいなのだが，彼女の語りからすれば少なくとも 6 人を彼女が紹介したという。

さらには，第二波は，M-8 の紹介でＤ家に嫁いだ M-1 が，いとこの S（調査対象外）と M（調査対象外）を紹介して，夫の弟たちに嫁がせたことによる。つまり，M-8 と S および M は，互いにいとこ関係でありながら義理の姉妹でもある。Ａ島では，社縁と血縁が融合している。

＜Ａ島の最初の結婚移民，M-8 は周りから頼まれて花嫁を紹介＞[4)]

インタビュアー：ここにいるフィリピン人の方はだいたい M-8 さんが。

M-8：老人たちは（花嫁を紹介してくれと）言った。私は義理のところに住んでいて，夫がキャプテン（自治会長）で …（中略）… 夫はギャンブル好きでよくパチンコに行くから。お金もくれない。そこの橋（Ａ大橋）ができてから，ここで（私は）タバコの仕事（注：葉タバコ栽培）をやっていた。夫はお金をくれないから。そしてここで多くのフィリピン人を紹介した。彼女たちも全員タバコで仕事させた。

インタビュアー：じゃ，一緒に仕事をしていた？

M-8：はい。私たちは幸せだった。老人が言った。「早く，M-8，（お嫁さんを）紹介して。（息子たちは）前から独身。早く紹介して。あんた（ここにいるフィリピン人が）一人だけでは寂しいでしょ？」うん，寂しいよ。あんなの時，私は 36 歳。

＜ M-8 はフィリピンパブの寮に遊びに来て後輩たちと交流＞[5)]

M-4：M-8 さん，一番（最初に）お嫁さんになった。

インタビュアー：じゃ，フィリピンパブに勤めてる時に

M-4：そうそう。

インタビュアー：フィリピンパブのアパートがありますよね？

M-4：うんうん。（M-8 が）遊びに来るんです。

インタビュアー：あ～じゃあ結婚する前から，M-8 さんのこと知ってるんですね。

M-4：知ってる。

インタビュアー：で M-8 は昔そこに遊びに行ってたんですか。

M-4：そうそう。まだ子供小さい時に一緒に。

4）模合

沖縄の金融習慣である模合は，参加者同士の信頼関係を作る。フィリピン人女性と結婚した日本人男性同士のネットワークのひとつが模合である。例えば，M-2 の夫，M-7 の夫，S（調査対象外）の夫，M-11 の夫は同窓模合の仲間であった。彼らは女性たちが来住する前からの親しい仲間である。仲間の 1 人がフィリピン人女性と結婚し，幸せな家庭生活を送っているのを見て，自分もフィリピン人女性と結婚したいと考えるようになった。さらには，模合で貯めたお金で夫はフィリピンへ結婚手続きに行っている。結婚移民の来日後も，夫同士が仲良しなので，互いに家族ぐるみで親しくつきあっている。また，フィリピン人の妻が夫の代理で夫の模合に参加する場合もあり，結婚移民と夫の親族とを近づけている。

＜夫が模合のお金でフィリピンへ来て結婚手続き＞[6)]

インタビュアー：えっと，ご主人とフィリピンで結婚したときに，ご主人もフィリピンに来ました？

M-2：はい。1 番最初は，2000 年。（夫が）同窓模合やってるさ。で，みんな 6 人ぐらい，M-7 の旦那もうちに，自分のうちに来て，フィリピンのうち。

インタビュアー：あーみんなで。模合で貯めたお金で，みんなで里帰りした。

＜夫の代理で夫のいとこ模合に参加する M-6 ＞[7)]

インタビュアー：お父さん方の家族の付き合いは？向こうは，その子どもさん以外のお父さんの兄弟とかみんなウェルカムしてくれた？

M-6：あーうんうん。大丈夫。だから。いつも行ってるよ，いとこ模合。

インタビュアー：いとこ模合。

M-6：毎月あるから。

インタビュアー：へー。それは M-6 さんが行く。
M-6：うん。
インタビュアー：ほー。
M-6：代わりに。
インタビュアー：あ，お父さん（夫）がいない時に。
M-6：うんうん。

模合はフィリピン人にとって馴染みがある。フィリピンではパルワガン（paluwagan）と呼ばれる金融習慣があり，その仕組みは模合とほぼ同じだ。来日後，フィリピン人同士で模合をして，フィリピンへ一時帰国するための費用等を融通しあう。本土での生活経験がある M-7 は「（模合は）内地はなかった」と語っており，沖縄在住のフィリピン人同士に特有の習慣であることがうかがわれる。カトリック教会では毎週日曜日のミサのほか月 1 回の教会模合が行われており，ここでは集まった資金から一定額を教会に寄付している。

＜フィリピン人同士の模合で帰省費用を融通する＞[8)]

インタビュアー：この，ね，今みたいに同じお店（注：フィリピンパブのこと）の人がいたりとか，フィリピンの人こっちに 70 人もいると …
M-7：私もわからないだから
インタビュアー：どういうときに一番助けられます？
M-7：お金が困ってるときもいるし，お金借りる …
インタビュアー：これは教会の模合とは別。
M-7：あ，教会の模合，別。
インタビュアー：教会の模合は 5,000 円ですけど，
M-7：そうそうそう。5,000 円，それでえっと，500 円も教会のもの。
インタビュアー：取った人が，500 円（教会に）入れるんですよね。で，今言ってるお金の貸し借りは，それとは別。
M-7：別，別。なんか困ってるだけ，誰かが。
インタビュアー：これどんな時ですか例えばお金で … あの，色んなのがありますよね。子どもの教育とか，フィリピンに帰るとか …
M-7：そうそう。あれと同じ。フィリピンに帰るからちょっと助け合いあります。… Travel expensive...
インタビュアー：ふーん。
M-7：（フィリピン人同士で）おもしろいときもいっぱいあるよ。… 例えばクリスマス。

Exchange gift もやるさ，遊びも，どこに集まり，遊びに行こうかーって夜によ，誰かの誕生日 … あっちでダンスホールやって，カラオケやって。… 一緒に。カラオケ歌ったり，踊ったり。

インタビュアー：いいですね。

M-7：でもほんと私は初めてこっち（宮古）で。内地はなかった。

インタビュアー：あ，内地にはなかった，こういうのは。

2. 地域社会への溶け込み

結婚移民たちは，嫁ぎ先の親族を回路として地域社会に溶け込んだ。姑が伝統的な地域行事で重要な役割を担っていると，嫁であるフィリピン人女性たち（M-1，M-10）もそれに従い参加する。また，婦人会等の地域組織に所属し，伝統的な祭りや敬老会の催し等，地域の行事にも参加している。

＜姑が司（つかさ）として拝む＞ [9)]

M-1：お母さんのお家とウタキ？

インタビュアー：ウタキ（御嶽）ね。

M-1：お母さんから連絡がある。今日は，「明日明後日，ウタキ泊まるから，その時に食べてね。」拝む，いろいろなお茶持ってくる，さげるとか，線香とか。

インタビュアー：お母さんは a kind of community religious leader みたいなね。ウタキで拝む人ね。ユタ？

M-1：ユタではないかな？ユタではない。

インタビュアー：ではない。ウタキで拝むのね。司（つかさ）。ローカルコミュニティーの人たちはみんなお母さんを … お願いするのね。着物着て。

M-1：着物着て。うちの娘が，うちのおばあがいつも着物。普段，洋服見たことない。

＜Ａ島の伝統行事に参加，いずれ敬老会にも＞ [10)]

インタビュアー：このコミュニティーでは日本人との交流はある？

M-3：ある，ある，ある。私たちはＱ祭りがある。

インタビュアー：Ｑ祭り？

M-3：パレードがあって，グループで分けて着物や浴衣を着て踊ったりして。いろんなグループがあって，パレードがあって。

インタビュアー：Ｑ祭りに参加したりしますか？

M-3：うん，毎年。（仕事を）休んでまでして欠かさずに。そして，敬老会。私たちは踊ります。ここ，Ａでゲストとして招待されて，フィリピン人の M-3 たちはフィリピン

の伝統舞踊を踊ります。敬老会の参加者はお年寄りばかり。大体 65 歳の方々がお祝いするイベントです。私も 65 歳になったら，敬老会に入る。

宮古島では 2008 年，M-5 を中心にフィリピン民族舞踊団「マブハイ・ダンス・グループ」が結成された。市の演芸会に出演するほか，2013 年にフィリピンのレイテ島が台風被害に見舞われた後は，宮古島婦人連合会の主催で「マブハイ・ダンス・グループ」がチャリティー演芸会を開催して寄付を募った。この様子は地元紙で報道され（『宮古毎日新聞』2013 年 12 月 10 日），フィリピン人結婚移民が集団として顕在化し周知されている。

＜宮古島市の演芸会に出られて嬉しい＞

インタビュアー：（フィリピン人女性たちは）演芸会があるってことは知ってたわけですね。

M-19（婦人会要職者，日本人女性）：そうそう，前から。（演芸会は）48 回だから。結局，10 人以上（フィリピン人が）宮古島にいるから，（彼女らは演芸会に）「出たいなー，（出る人が）うらやましいなー」と言ってたらしい。それで（私が「出ないか」と）声かけた時には（彼女らは）もう嬉しくて。だってもうチケット 50 枚は売ったもん。ババババババって，自分たちの親戚に。その時 1,500 円ですよ。1,500 円の 50 枚バーッと売ってきたもん。見事に。すっごいなーと思ったもん。だから，すっごいパワーです。

3．結婚移民女性の地域社会への貢献

大都市と比べると，人口規模が小さい宮古においては結婚移民女性の存在感はより大きい。彼女らの貢献の一つが家族形成と子育てを通じた地域の活性化と言えるだろう。直接的な表現をすれば，人口増加への寄与である。事実，2013 年度を最後に廃校となった A 中学校の最後の卒業生は M-1 の長男，S 君であった（『宮古毎日新聞』2013 年 3 月 13 日）。また，過去の A 中学校の学級新聞等を見ると，それ以前の卒業生にもフィリピン系の生徒の名前が多く見られる。

また，表 1 で示したように，2000 年代から宮古およびA島ではベトナム人の結婚移民も増えている。フィリピン人とベトナム人は，同じ病院内で介護職員として働いている。M-3 は，新たな結婚移民であるベトナム人女性に仕事の仕方や日本人との付き合い方を教えている。両者の集団間関係については今後も観察が必要だが，次世代の結婚移民の定住を促しているのが現在のフィリピン人結婚移民とも言えよう。

＜ベトナム人結婚移民の同僚に，日本人との付き合い方を教える＞[11)]

M-3：で，（介護施設で）このベトナム人（の同僚）はまだ新人だが性格が悪い。うるさい。

インタビュアー：あ，うるさい。

M-3：Y（ベトナム人女性）は，まだ若いから。日本人は「だめ。これはだめ。だめ，だめ」（と彼女に言う）。彼女は指摘されると怒る。私は（彼女に）「黙って彼ら（日本人）に従ってよ」と言った。「日本人は怒っているときは，黙って（おけばいい）」「いいよ，要らないよ，あれは」（と彼女は言う）。休憩やご飯のときに（Y は）仲間がいない。いつも一人。命令に従わない。だから，相手にされない。私も彼女に怒っている。毎回彼女に「言うことを聞いて，これをやって」とアドバイスをする。

ある日，彼女が一人で食べているのを見て，かわいそうに思った。彼女は仲間外れされている。休憩室に入ったとき，彼女は怒っているような顔をしていた。それで私は「Y，話がある」と言った。「フィリピン人が嫌いか」と聞いた。「私はあなたに対して怒ってはいない。指導しているだけだ。あなたの気持ちが分かる。同じく外国人だから。ここに入ったばかりの頃は同じだ。指導されるのは当たり前だ。私たちはもう慣れているから私たちの言うことを聞いた方がいいよ。だから，日本人じゃないから指導する資格がないなんて言わないで。私たちは同じだ。何でも教えるから。ほら，みんなあなたに対して怒っているよ。それでいいの？教えてもらわないとできない。彼らが団結して，あなたをクビにさせることができるよ。だから言うことを聞いて。私はあなたを自分の子どものように思っている。でも，あなたの口の利き方は悪い。それで彼女は「ごめんなさい，これから頑張る」と言った。だから（私は言った）。「彼ら（日本人）の言うことを聞いて。あなたはを私の子どもみたいに思っている。彼ら（日本人）があなたに構ってくれないのを見ていられない。」

Ⅳ．むすび

1．本土都市圏と共通

以下，本調査から得られた知見を，本土都市圏のフィリピン人結婚移民の生活やネットワーク形成と比較しながらまとめていきたい。まず，本土都市圏在住者と共通するのが，興行労働を端緒とした女性の結婚移民であることと，定住後はサービス産業が就労の場となることである。例えば，ホテルの掃除や介護職員は本土で発行されている在日フィリピン人向けの求人広告でも頻繁に募集がなされている。日本語の読み書きが完璧にできずとも就労可能な場として，これらの産業がフィリピン人結婚移民に働く場所を提供している。

2．石垣・宮古に特有

本土にはなく，沖縄（特に石垣・宮古）の結婚移民に見られる特徴が，在住フィリピン人同士の同質性である。つまり，石垣・宮古では結婚移住以外の来住経路がほぼ無い。さ

らには，技能実習生を雇う事業所がなく，技能実習生（20 代の男女）がいないため，そこにいるのは 30 ～ 40 代の女性ばかりである。また，近年はフィリピン人女性の婚入が少ない。彼女らは宗教的にも同質的（カトリックの信仰）である。林（2013）が指摘したとおり，Ａ島においてはフィリピン人女性の婚入が特定の時期（1990 年代～ 2000 年代前半）に集中して見られた。林の研究ではフィリピン人女性は「未知の存在」として扱われたが，本研究により，彼女らは世代および職業経験において同質的であり，紹介婚による連鎖移動で来住しているため，来日の前後で親族関係や人間関係が連続性を持つことが明らかになった。これらの要因が結婚移民の定住を後押ししたのであろう。

さらには，フィリピンとの文化的，自然環境的な類似性も沖縄に特有と言える。亜熱帯から熱帯の気候に加え，植生もよく似ている。庭先の植物がフィリピンと同じだ。さらには，模合という金融文化や，本土に比べてアメリカ文化の影響を強く受けていることなどから，フィリピン人にとって沖縄およびその離島は暮らしやすい場所となっている。

3. 戦前／戦後の沖比間の人の移動史との連続性

先行研究の多くが，戦前の沖縄からフィリピンへの出稼ぎ労働，そして 1972 年までの主に沖縄本島とフィリピンとの人の移動と米軍基地での就労に焦点を当てていた。しかし，石垣および宮古では米軍基地による人の移動とは無縁で，かつ，戦前の沖縄への出稼ぎ労働／引揚とも無縁である。同地でのフィリピン人は「商業的に募集・雇用された興行労働者」として来日し，その後「離島に嫁いだフィリピン人の結婚移民女性」として理解するほうが適切であろう。本調査のデータは沖縄本島よりもむしろ，本土の離島および過疎地との比較に適していると思われる。

4. 今後の課題

石垣と宮古においては，フィリピン人結婚移民の「流入」の時代はすでに終わっている。第二世代は高校卒業後の大学・専門学校への進学を契機として沖縄本島，九州，大阪等へ流出している。カトリックの信仰やフィリピン語やフィリピン文化等，民族文化の世代間継承は大変難しいのが現実である。

Ａ島においては，2010 年代からは業者婚によるベトナム人花嫁の来日が増えている。国籍は変わっても結婚移民の来島は続いているのである。嫁ぎ先はいずれも農家であり，離島の農業を支える人材として外国人花嫁はつねに必要とされていると言えよう。フィリピン人がベトナム人を職場で指導する事例も見られるが，集団としての両者の関係についてはさらなる観察を要する。

フィリピン人の場合，今後は結婚移民の高齢化が課題となるだろう。本調査の対象者で

も，60 代となった M-8 はひ孫の顔を見にフィリピンへ里帰りしたいと言い，50 代後半の M-3 は 2015 年に日本人夫を看取り，自分も間もなく敬老会に参加すると語っている。本土の離島や過疎地との比較に加え，今後，A 島におけるフィリピン人結婚移民の暮らしがどのように変容するのか，また島全体がどのように人口を維持していくのか，継続的に調査をしていきたい。

謝辞

本稿は，科研助成研究（平成 25-27 年度，基盤 C「沖縄・先島地域のトランスナショナルな移動と社会関係 — フィリピン人女性を中心に」代表:野入直美，共同研究者:高畑　幸，松田良孝，中西尋子，水田憲志，矢元貴美）の成果の一部である。調査に協力いただいた皆様，第 33 回日本社会学会大会における報告（2015 年 9 月 19 日，早稲田大学）で非常に有益なコメントを下さった皆様にお礼を申し上げます。なお，調査地での社会関係，組織等は取材当時のものである。

注

1）林氏の原著題名には A 島の実名が出ている。しかし，本稿では関係者のプライバシー保護のため，末尾の参考文献リストでも題名の表記を「A 島」と一部改変させていただいた。林氏には失礼をお詫び申し上げる。
2）フィリピン語で聞き取り。
3）フィリピン語で聞き取り。
4）フィリピン語で聞き取り。
5）日本語で聞き取り。
6）日本語で聞き取り。
7）日本語で聞き取り。
8）日本語で聞き取り。
9）日本語で聞き取り。
10）フィリピン語で聞き取り。
11）フィリピン語で聞き取り。

文献

阿部亮吾（2011）『エスニシティの地理学 — 移民エスニック空間を問う』（古今書院）.
賽漢卓娜（2011）『国際移動時代の国際結婚 : 日本の農村に嫁いだ中国人女性』（勁草書房）.
杉井　信（2010）「沖縄に戻れなかったフィリピン人たち — 米軍統治下沖縄における沖比国際結婚家族へのまなざし」『沖縄研究』133-156.

鈴木規之・玉城里子（1996）「沖縄のフィリピン人 ― 定住者としてまた外国人労働者として（1）」『琉球法学』57:39-66.

鈴木規之・玉城里子（1997）「沖縄のフィリピン人 ― 定住者としてまた外国人労働者として（2）」『琉球法学』58:1-32.

Takahata, Sachi (2015) "From the Philippines to Japan: Marriage Migrants and the New Nikkei Filipinos", in Yoshitaka Ishikawa (ed.), *International Migrants in Japan: Contributions in an Era of Population Decline*, Melbourne: Trans Pacific Press, pp. 97-122.

武田里子（2011）『ムラの国際結婚再考 : 結婚移住女性と農村の社会変容』（めこん）.

津崎克彦（2010）「第 4 章　フィリピン人エンターテイナーの就労はなぜ拡大したのか ― 歓楽街のグローバリゼーション」五十嵐泰正編『労働再審 2　越境する労働と＜移民＞』（大月書店）189-230.

林　研三（2013）「琉球・A 島の家族慣行と祭祀組織 ―『法的慣行』としての『伝承』とその解釈的構成（その 1）」『札幌法学』25(1):37-66.　＊題名に一部改変

Yu-Jose, Lydia（2002）*Filipinos in Japan and Okinawa 1880s-1972*, Research Institute for the Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

ズルエタ，ジョハンナ（2013）「沖縄における『フィリピン・ウチナーンチュ』の『帰還』移動 ― 移動の交差する場所」吉原和男編著『現代における人の国際移動 ― アジアの中の日本』（慶應義塾大学出版会）207-229.

（たかはた　さち・静岡県立大学国際関係学部准教授・社会学）

Filipino Women in Sakishima Islands, Okinawa: Their Lives as Marriage Migrants

TAKAHATA Sachi

School of International Relations, University of Shizuoka

(sociology)

Key words：Filipinos，marriage migrants，chain migration，entertainers

This article aims to reconsider the settlement of marriage migrants in the local community in a remote island, with focus on the social conditions to ease their settlement as well as their roles in the local community. Based on the qualitative data on the Filipino marriage migrants in “Island A”, a remote island which belongs to Miyako Islands of Okinawa Prefecture, we have been able

to elucidate the following 4 points. First, in Sakishima Islands (including Ishigaki and Miyako Islands), Filipino women worked as contract workers in the entertainment industry and then became marriage migrants. Therefore, their settlement was not because of their employment at US bases, contrary to former Filipino migration to Okinawa. Second, in Island A, the chain migration of women occurred through the 4 networks; local community, kin, corporation and "*moai*". Third, Filipino women have been integrated into the local community by assisting their mothers-in-law who act as shamans, as well as organizing an ethnic dancing group to join the city's entertainment fair and make their existence apparent to the public. Fourth, in recent years Vietnamese are coming to Island A as marriage migrants. Filipinos and Vietnamese are working in the same caregiving industry, where Filipinos give guidance in how to communicate with Japanese and cope with life in Japan. The inter-ethnic relationship between Filipinos and Vietnamese needs further observation.